

# 平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

## 1. 学校概要

学校名 桜美林中学校・高等学校 (※正式名称を記載)

種 別 ☐ 保育園・幼稚園 ☐ 小学校 ☐ 小中一貫<sup>※注1</sup>

☐ 中学校 ☒ 中高一貫<sup>※注2</sup> ☐ 高等学校

☐ 教員養成大学 ☐ 専修学校、各種学校

☐ 特別支援学校

☐ その他 (例: 小中高一貫 )

※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒194-0294

東京都町田市常盤町 3758

E-mail

Website http://www.obirin.ed.jp

幼児児童生徒数 男子 776 名 女子 904 名 合計 1680 名

幼児・児童・生徒の年齢 13 歳 ~ 18 歳

## 2. 報告期間

平成 29 年 4 月 ~ 平成 30 年 3 月

※報告書提出時点 ~ 平成 30 年 3 月末までの活動は、予定 (見込み) として記載ください。

## 3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

(1) 活動の概要 (800 字程度 + 活動内容を表す写真数枚)

※チェック事項 1-1、2-1 に対応

当校は、伝統的に力を入れてきた国際教育・英語学習・海外とのネットワークをさらに発展させるため、「隣人愛：持続可能な地球規模の共生社会をめざす」プロジェクトを立ち上げ、ESD を推進している。このプロジェクトでは、ESD を柱として世界的課題につながる自分たちができる取り組みを「平和」「環境」「国際理解」の 3 テーマを中心に実践することで、地域社会や国際社会に貢献する人材の育成をめざしている。具体的には、①平和学習プロジェクト②環境教育プロジェクト③国際理解プロジェクトによって、生徒たちに持続可能な社会の担い手に必要な知識、能力、態度、価値観を身につけさせる学習をおこなった。

### ① 平和学習プロジェクト

当校では、まず「心の平和」を達成することを目標として、聖書や礼拝の時間を使い、一年をかけてすべての生徒がノートを作成した。毎週の講話を聴きながら、生徒たちは平和な世の中をイメージして、自分の考察をその都度ノートにまとめた。さらに中学校では平和な社会を生きるための主体的なコミュニケーションスキルの向上をめざし、演じたり発言したりしながら、自分はどうのように感じ

、相手はどう思ったかなどを学習した。高校では平和な世界を築いていくために必要な「多面的・総合的な思考力・分析力」を養うために、世界史の授業で戦争の歴史を学んだ後、他者との協働によって平和を実現する方法を学習した。さらに沖縄への修学旅行で戦争や基地問題について現地の関係者や大学生との議論を行った。その後のカリキュラムでは、国際紛争や経済格差などの地球規模の問題についてディベートを実施して理解を深めた。

## ②環境教育プロジェクト

中学校では「自然との共生」に気づかせるとともに、地球規模の問題解決への糸口を調べ学習と農作業の取り組みとして学んだ。その後で、長野県の飯田やオーストラリアで農家体験を実施し、地域社会における自然との共生や環境保全について学習した。高校ではさらに発展させて、被災地支援活動として東北へのボランティアに参加した。被災地の人々の思いに応える活動を自分たちで考え、事前事後学習を通して、環境保全の手法に関する知識を得るだけでなく、持続可能な社会を担う責任感を養う努力をかさねた。

## ③国際理解プロジェクト

中学校では「主体的なコミュニケーション力」をより深化させるため、異文化をもつ人々との協働学習を重視した。具体的には姉妹校である北京外語大付属中学校（中国）や順天梅山中学校（韓国）と相互交流を行い、お互いの文化について話し合い、その成果を発表した。高校では、国際化において生じる問題について具体的な解決に向けて行動できるように必要とされる能力の育成や知識を習得し、自ら考え、他人の意見を聞きつつも、自分の意見を主張できる能力を伸ばした。そのために、韓国の姉妹校である細花高校と派遣交換を実施し、お互いの文化や歴史について討議をした。



(2) 活動の詳細

① 活動内容

※チェック事項 1-2, 2-1 に対応

ア. 活動分野（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 環境	<input type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input type="checkbox"/> 3. 防災	<input type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input type="checkbox"/> 10. 食育	<input type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input type="checkbox"/> 16.ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他( )		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力（複数選択可）

<input type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入 )	

ウ. 活動時間（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input type="checkbox"/> 5. その他(自由記述 )	

エ. 使用した教材（書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名）

オリジナルテキスト「コミュニケーションスキル」「沖縄への道」  
DVD「激動の昭和史」「ブタのいた教室」  
ウェブ「紛争ウェブリンク集」

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（２００～３００字程度）

※チェック事項 1-2, 1-3 に対応

ESDを中高六年間のプロジェクトとして位置づけ、主として総合の時間やLHRに発展的な授業を設置している。さらに3つのプロジェクトが相互に関連するように、各教科で平和や主体的な学びを重視した参加型授業を行った。また、多くの生徒がプロジェクトに携わることができるように、多種多様な特別活動を計画し、国内外の姉妹校との相互実践を通じた交流や、平和を愛する心を養う教育に触れる機会を増やしている。

たとえば、被災地支援活動では、現地の学校との交流を通じて地域ぐるみの新しい防災体制づくりを学んで、それを当校の生徒会や委員会が自分の学校の防災意識へとつなげ、教員も参加した学校全体の防災教育として発展させた。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（２００字程度）

※チェック事項 1-4 に対応

今年度よりユネスコスクールに加盟した当校では、まず教員の委員会を発足させ、3つのプロジェクトに合わせたカリキュラム改定を進めた。それに伴ってこれまで独自に行ってきた海外交流や委員会活動などをESDの観点から再構成し、全校をあげて有機的な組織づくりに本格的に取り組んでいる。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。（２００字程度）

※チェック事項 1-5 に対応

加盟が今年度からであったので外部評価は行っていないが、活動全体の内部評価はそれぞれの学年において実施された。テーマごとに他者との協働や思考力・分析力、コミュニケーション力などの観点から、生徒たちが持続可能な社会の担い手に必要とされる能力を身につけているかどうかを評価した。これは特別活動や総合学習、教科学習において行われ、生徒たちは学年が上がるにつれて、発展的な学習を求められた。

- ⑤ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度) ※チェック事項 2-2 に対応

科学技術振興機構(JST)の事業「さくらサイエンス」に採択され、中国の姉妹校である陳経綸中学を招いたプログラムを実施した。防災・減災について多角的に具体例を挙げながら学習し、防災、減災に対する意識を高め、具体的な対策を考えることを目的とした。当校付属の大学において、環境・災害の両面の研究を行っている担当教員の協力を得て講義、実験等を行うとともに、日本と中国の高校生の防災、減災に対する取組を報告、検証しながら、防災・減災と環境の改善・維持、ひいては持続可能な社会構築へと視点を繋げることができた。また、大学での講義・実験だけではなく、災害問題、環境問題に係わる学外の施設の見学も実施した。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成(地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など)  
(200字程度) ※チェック事項 2-3 に対応

国連大学主催の中国教職員招へいプログラムの受け入れを行った。中国各地から選出された教職員に、当校の授業を公開し、ESDの理念にもとづいたさまざまなプログラムや活動を紹介した。授業や部活動では生徒たちと交流し、中国と日本の教育事情について活発な意見交換をすることができた。とくに、ICT教育の動向について、両国の現状を報告し合う機会があり、将来の可能性や問題点などに気づくことができた。

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成(200字程度) ※チェック事項 2-4 に対応

災害科をもつユネスコスクールの多賀城高校が主催する「東日本大震災メモリアル day2017」に参加した。多賀城高校とは以前より被災地支援活動で交流があり、当校は東京都から唯一の参加であったが、被災の経験のある都道府県から多くの高校生が集まり、活発な議論が行われた。当校は東北のボランティア活動や防災体制などの報告を行ったが、各校から持続可能な防災・減災の体制づくりについての考察を継続的な交流によって続けていくことが確認された。

- ⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）  
※チェック事項2-5に対応

当校では、持続可能な防災体制づくりをめざして東北支援活動を開始し、6年目を迎えるが、最初は部活動単位の活動であったものが、全校あげての「さくらプロジェクト」として発展した。これは生徒の自主的な参加や活動によるところが大きく、さらに参加した生徒が当校を卒業後もプロジェクトの発展に貢献しようという行動に支えられている。参加した生徒からの保護者への呼びかけや、地域社会への働きかけへと活動は広がっていき、ESDを柱とする本校の教育理念を具現化するプロジェクトへと完成しつつある。

（3）平成30年度の活動計画（200～400字程度）

ユネスコスクール加盟の初年度として、1年間を振り返って検証したうえで、来年度はとくに2つの点においてさらなる改善を加えていきたい。

一つは、より教科横断的なカリキュラムの設定である。ESDを取り入れた学習が単一の教科や単発の授業で終わらないよう、年間を通じたカリキュラム設定の中に、国際関係の行事などと連関させながら中高六年の発展的学習として位置づけていきたい。カリキュラムと同時に、ESDにつながる評価基準を明確にし、生徒の学習活動をより多角的に評価できるような体制づくりをしていく。

もう一つは、SDGsや国際協働プロジェクトをより積極的に当校の教育活動に取り入れていきたい。とくに「貧困の解決」は、当校の創立者のめざしていたテーマの一つでもあったので、当校の①平和学習プロジェクトのカリキュラムの中へ位置づけると同時に、国際協働のプロジェクトと関連づけた、新しい活動を始めたい。そこでは、多くの生徒が参加できるよう、体験型学習を導入しつつ、ICTを活用した授業を展開して世界的な学校間ネットワークの枠組により、アジアの学校との交流を進めていきたい。